

ヨヤキム王の治世4年には、エレミヤは預言活動を始め 23 年ほど経ち、壮年となっていました。民はエレミヤの言葉に耳を傾けず、従わなかったと嘆いています。エレミヤは神殿の門ではなく、庭に入って 主の言葉に従わなければ、この神殿をシロ(捨てられた最初の臨在の幕屋)のようにし、この都を地上のすべての国々の呪いの的とする(26:6) と語り始めます。この預言を聞いた祭司、預言者たち、すべての民はエレミヤを捕らえました。新しい門の前で裁きが行われました。都に敵対する預言をしたため、祭司、預言者たちは、エレミヤは死罪に当たると主張しました。一方、高官、長老、民は預言者ミカを例にとり、神の名による預言を聞くことは、主を畏れ、恵みを祈り求めることになると考えました。このことの結果が記されていませんが、20 章 1 節の神殿の最高監督者祭司パシュフルが、エレミヤを打ち、神殿の上のベニヤミン門に勾留し、翌日解放したという記事がありますので、この時のことを指しているのではないのでしょうか。これが **エレミヤが受けた最初の迫害**です。エレミヤは神殿に入ることを禁じられました。エレミヤはこの時、ユダヤ教に改宗した異邦人であるレカブ人が信仰を守り、バビロンの攻撃を避けて、質素に天幕で暮らしている様子を知り、深く感銘を受けました。

この頃、ネブカドレツアルがバビロンの王位につき、ユダ王国を攻めては、略奪を重ねていました。エレミヤは **見よ、わたしはわたしの僕バビロンの王ネブカドレツアルに命じて、北の諸民族を動員させ、彼らにこの地とその住民、および周囲の民を襲わせ、ことごとく滅ぼし尽くさせる、と主は言われる(25:9)** と語り、同時に「バビロンに 70 年間仕えるが、やがてバビロンも滅びる」と、将来を見通して、希望を持って今を耐えよと預言しました。



この頃ネリヤの子バルクに口述筆記をさせ始めました。以前に預言した言葉も、バルクに書き記させました。時系列が交錯しているのはこのせいでしょうか。

バビロンの脅威は増し、治世 5 年 9 月に全住民に断食の布告が出されました。エレミヤは「すべての人々は主の下す災いを思い、悪の道から立ち帰るかもしれない、そうすれば、民の罪と咎を赦す」との神の言葉を聞き、バルクに命じ、エレミヤの言葉を記した巻物を、神殿の庭に行き、エレミヤの代わりに読み上げるよう命じました。バルクは神殿の庭でエレミヤの言葉を読みました。

王の書記官ミカヤはこれを聞いて驚き、王宮の書記官の部屋に行き、役人たちにその言葉を伝えました。役人たちも驚き、バルクに巻物を持って来て読むように命じました。バルクが読み聞かせると、彼らはみな、おののいて顔を見合わせ、王に伝えなければならないと言います。けれどもその前にエレミヤとバルクに、急いで身を隠すように命じました。

ヨヤキム王はエレミヤの言葉を聞かされ、巻物を読み上げるように命じます。書記官が三、四欄読み終わるごとに、王は巻物をナイフで切り裂き、暖炉の火にくべ、すべて燃やしてしまいました。巻物を燃やさないように懇願する書記官がいましたが、王も側近も誰一人神の言葉を畏れませんでした。悔い改める者はいなかったのです。ヨヤキムはエレミヤとバルクを捕らえようとしたましたが、二人は見つかることはありませんでした。

ヨヤキム王はエレミヤの言葉を聞かされ、巻物を読み上げるように命じます。書記官が三、四欄読み終わるごとに、王は巻物をナイフで切り裂き、暖炉の火にくべ、すべて燃やしてしまいました。巻物を燃やさないように懇願する書記官がいましたが、王も側近も誰一人神の言葉を畏れませんでした。悔い改める者はいなかったのです。ヨヤキムはエレミヤとバルクを捕らえようとしたましたが、二人は見つかることはありませんでした。

ヨヤキムの暴挙に対して、主は罰を与え、ヨヤキムの子孫にはダビデ王の王座に就く者がなくなるとの主の言葉がエレミヤに告げられました。エレミヤは燃やされた巻物の言葉と同じ言葉を、再度すべて口述し、バルクは別の巻物に書き記しました。

エレミヤは民の背信に絶望し、バビロンの攻撃を恐れ、国の行く末を予測し、嘆きと悲しみの涙を流します。神の裁きは受けても、神の民が無に帰すことがないようにと祈ります。